

ミニトマト黄化葉巻病対策と 新品種導入による高品質安定生産技術の支援

■ 仲多度地区ミニトマト生産者 ■

（中讃農業改良普及センター 茂木文子）

●対象の概要

中讃普及センター管内では、多度津町、善通寺市、まんのう町、坂出市などでトマト類の栽培が行われており、特に仲多度地区は、県内でも有数のミニトマト産地となっている。栽培方式は土耕栽培、ロックウール栽培、養液土耕栽培など各種方式が導入されている。作型は地域によって異なるが、促成長期どりと夏秋どりの二つの作型を中心に経営が行われている。

●課題を取り上げた理由

1) 黄化葉巻病の発生

トマト類における難防除病害のひとつであるトマト黄化葉巻病が、仲多度地区においても平成16年の初発生から継続して発生している。この病害は微小害虫であるタバココナジラミ類が媒介するウィルス病で、特に生育初期に感染・発症すると収量が激減し、経営に与える影響が非常に大きい病害である。初発生以降、農業試験場、JA、普及センターなどで病害拡大防止に関する様々な調査・研究が行われており、その成果を基に講習会・巡回等により病害対策について継続指導している。

しかし媒介虫の防除が困難であることに加え、当地区の主な作型である促成長期どりは、定植時期が家庭菜園等でもトマト類が多く栽培されている8月であるため、地域内の媒介虫の発生密度が高くなり、対策管理や薬剤防除等に対応しても病害の発生を完全に抑えるのは難しくなっている。その結果、発病率の変動はあるものの毎年被害が発生しているのが実状である。この要因として、①対策技術が徹底できていない、②対策技術が難しい・できない、③野外での害虫（ウィルス）密度が非常に多い、などが考えられた。

2) 従来品種の生育面の問題

仲多度地区におけるミニトマトの品種は平成20年ごろまでは多収で良食味の「千果」が主要品

種であった。当該品種は①樹勢コントロールが難しい、②葉かび病などの病害の発生が多い、③収穫前後での裂果が非常に多い、などの欠点があり、生産者の作業負担や品質への影響が大きかった。

葉かび病については耐病性品種が各種苗会社から発売され、それらの品種を利用することにより発生は減少したものの、樹勢のコントロールや裂果は依然として満足できるものではなかった。

以上の点から、より安定したミニトマト生産を目指して、黄化葉巻病の発生防止技術の検討および有望と思われる品種の現地実証試験等を行い、問題の改善を図ることとした。

●普及活動の経過

1. 黄化葉巻病対策の確実な実施および継続した意識啓発

病害対策の基本となる「(病害および媒介虫) 入れない・増やさない・出さない」技術について、的確な時期ごとに講習会を行った。また、巡回指導を関係機関と連携して定期的に行い、基本対策技術の励行と継続した実施により、できるだけ病害・害虫密度を下げるという意識啓発を行った。

2. 薬剤防除方法の検討

黄化葉巻病対策のポイントのひとつは、定植前後の一定期間、継続して効果のある防除対策を実施することである。現在は、定植前防除＋定植時粒剤施用＋活着後防除が実施されているが、実施方法などにより防除効果に差があったり、粒剤の植穴処理が重労働であるといった問題点がある。これらを改善するため、最近の新規・登録拡大された殺虫剤で有望と思われるものについて現地試験を行い、効果的で省力的な防除方法を検討した。

3. コナジラミ類拡散防止技術の実証

コナジラミ類の増加防止のため、防除暦に準じた防除指導を行っており、定期防除の重要さの意識は高まっている。しかし栽培後半、特に5月以降は収穫作業に多大な労力がかかるため

定期防除が実施されず、コナジラミ類が多発しているほ場が散見されている。ほ場内にウィルス感染株があれば、そこで保毒したコナジラミ類が野外に飛び出してハウス近隣で増殖し、次作のウィルス感染の危険性が高まる。このため、栽培終了時にコナジラミ類を野外にできるだけ出さない対策が必要であることから、従来の「断根+ハウス密閉処理」よりも、株の枯死が早く害虫死滅が早い「液剤灌水処理技術」の展示を行った。



液剤灌水処理の様子

4. 有望品種の検討

栽培管理面での改善のみでは克服しがたい品質・病害等の問題点について、新たな有望品種との比較による検討を行った。特に裂果については夏秋・促成長期どりともに重要な課題であったため、裂果耐性が高いと思われる品種について作型別に現地実証試験を行った。

●普及活動の成果

1) 黄化葉巻病対策の改善

定植前後の薬剤防除法は、粒剤処理に比べてより省力的な方法である灌水処理を検討した結果、処理方法によっては薬害のおそれがあるなどの問題があるものの、防除効果は高かった。また生産者の作業負担も少なく省力的であり、費用も粒剤より安価であった。これらの結果について講習会で周知するとともに、栽培資料および防除暦に随時反映していくこととなった。

栽培終了時のコナジラミ類飛び出し防止対策の液剤灌水処理展示については、慣行圃場に比べて栽培終了時のコナジラミ類の発生は多かったにもかかわらず、ハウス外への逃亡虫率が

少なく、死滅にかかる時間も短くなった。またハウス密閉による高温確保が難しい天候時でも薬剤のガス化による虫の死滅・株枯死が進むため、その後の作業配分の予測が立てやすくなった。これらの点について現地および講習会等で説明した結果、土耕栽培を中心に徐々に導入が進んできている

2) 有望品種の選定

有望品種の現地実証試験を行った結果、1品種が、整枝作業面でやや作業量が多いものの、裂果が比較的少ないうえ、樹勢の強弱がつきにくく生育障害が発生しない点が優れていると考えられた。収穫物の外見上の品質についても、部会内では「従来品種より良い」という意見が多く、反応は良好であった。今後は病害発生的一面や市場の反応等についても考慮し、拡大の検討を行う予定である。



品種比較展示圃場

●今後の普及活動の課題

防除方法・品種については、今後とも有望と思われる薬剤や品種などについて随時検討を行い、生産者の負担軽減や品質の向上及び生産安定を図る必要がある。

また、病害発生防止に対して生産者の意識は高まりつつあるものの、繁忙期などで対策が後手となったり、発生から年月が経過するにつれ防除対策に対する意識の低下が懸念されるため、引き続き意識啓発を行っていく必要がある。